

## 『太一たいいちについて』（大だい一いちも同義）

神宮式年遷宮のしるしとして用いられる「太一」は、古くは鎌倉時代の造営記録に見えます。

太一の漢語が意味する「万物を含有する大道」や「天神・北極大帝のこと」とされるところから、天照大御神が八百万の神々の中心的存在にましますことを象徴して、この標章を神宮式年遷宮に使うようになりました。

尚、御遷宮のしるし以外にも、篠島から御贄干鯛や、国崎からの鮑あわび、また垂坂村の糶こうじや、有爾うにの土器の場合等神宮御用の幟旗のぼりに「太一」を用いた例も多くあります。伊雑宮の御田植にたてられる竹の先には、宝船を描いた扇が結びつけられるが、その帆の中央には太一と書かれています。また近世お伊勢参りで賑わった旧伊勢街道沿いには、今も太一を刻んだ常夜灯が多く残されています。

このように太一のしるしは、造営の専用ではなく、本来神宮に使用するのが慣例であったが、現今では御遷宮に使われることが多く、御樋代木の伐採式や御木曳等に使われています。

今回、御樋木奉迎送三重県実行委員会が作成したこの法被はっぴの文字は、津市美杉町瀬之原にある常夜灯（天保十五年）から拓本をとらせていただいたものです。

